

こ  
の  
子  
の  
な  
な  
つ  
の  
お  
祝  
い  
に

かごめ かごめ  
かごのなかのとりは  
いついつでやる  
よあけのぼんに  
つるとかめがすべった  
うしろのしょうめん  
六人ほどの子どもが、かごめかごめをして  
遊んでいたかと思うと、ふと一人の少女を  
して皆いなくなっただけ、うしろの正面  
うずくまっていた鬼役の少女、みやが、目  
に押し当てていた両手をどけ、うしろの正面  
を振り向いても、誰もいない。みやは他の子  
どもの名前を叫んだが、返事も無い。  
「やえちゃん！ 文吉！ ・ ・ ・」  
一時のからかいではなく、本当に皆みやを置  
いて去ってしまった。江戸時代、大  
阪天神橋の近くに暮らしているその子どもた  
ちの中でも、みやはみすぼらしい佇まいと緩  
慢な振舞いで目立っており、そのようにふと

仲間はずれにされることも多かった。  
ただ、みやはそんなことにも気づかない天  
性の鈍感さで、翌日にはその子らについてま  
わるのだった。  
「みんな、帰ってしもたんかな」  
みやは神社の境内にあるその空き地で一人  
しばらく誰かがひよっこり戻るのを待って  
たが、現れたのは子猫だけだった。みやが子  
猫に近づくと、子猫は逃げて木陰に潜んだ。  
そしてそこには親猫もおり、二匹はじっとみ  
やをみた。みやは猫をみかえした。親猫がす  
りよってきたので撫でてやったが、みやはな  
にもやれるものがない。  
「おかあもおったア。うちもおかあのとこ  
かえろ」  
文吉とやえはとつくに神社の境内を出て、  
家の近くの通りを歩いていた。  
「あの神社、一つ目の鬼がおるらしい」  
「おお、こわ。みやちゃん食べられてしま

う  
「とろいからのオ、みやは」  
それをきいてやえは笑って、そして、今住  
吉で有名な飴の話を見聞げにしはじめた。  
「住吉の、食べたら千歳まで生きられる飴  
うちお祝いに買ってもらえんやうて。うち  
もうすぐ七つになるから、祝に」  
「ええな、五つの時に飴なんてなかったな  
ア」  
みやの家の前を通りがかる頃に、そのあば  
ら家からみやの父母の声がぼそぼそと漏れ出  
ていたが、二人は気づかなかった。  
「どうせ売らなら、もっと早うに売ってや  
ればよかったんじゃ。あとになればなるほど  
辛くなるんに。あの子はもう七歳や」  
「わしも口減らしなんぞしとうなかつた。  
わかっ取るやろ。竹籠も箕も売れん。奉公  
に出すにもみやはとろうて働けん。殺すわけ  
やない。」

「子ども一人も育ててやれんとはなんて情けない。われが代わって地獄にでも落ちれば助かるものなら、助けてやりたい。ほんまにどうしようもないんか」

「良い時期もあれば悪い時期もあったが、良い時期でもずっとひもじかったやろう。一日物も売れず日が暮れるのを待ただけが長うなあって久しいやないか。みやもこれでめにしにありつける。どうか、わかつておくれ」

そして疲れた笑顔で迎えた。父と母は硬くみやたちが遊んでいたその神社、かの天満宮から遠くないところにあつたが、もう社も朽ちはじめて建て直しの見込みもなく、参拝の人も寄りつかない有り様だった。八百万の中にも富める神と貧弱な神がいるかと、実は年齢七十近い神主、貫三郎は笑っていた。実は貧困のあまりに、世間に隠れて紙風船を作り売るような有り様だった。跡継ぎもなくその

まま朽ちるとの噂も広まっていた。だが、神  
主には実は息子がいた。  
神職を継ぐべく育てられたのだが、三歳の  
時にやった奇妙な熱病のために死にかけた。  
神に祈り、医者も呼んだが良くなる兆しがな  
く、五日目の夜に右目が腐り落ちた。夜通し  
泣きながら目を失った後、翌朝には命をとど  
めて延々眠り始めた。片目になった幼子は、  
父から与えられた義眼も捨ててしまい、右目  
が穴凹となったまま生きた。周りの子らにか  
らかわれると、必ず喧嘩して相手を泣かせて  
帰ってくる暴れん坊だったが、父母の前では  
おとなしかかった。  
そして、五歳の袴着の儀の後のことだ。そ  
の子は行方知れずとなった。貫三郎は方々、  
山の中も町の中も探し回ったが、一年が過ぎ  
二年が過ぎる頃、終に神に隠されたのだとあ  
きらめるまでに至った。  
もし万が一、その子、浅之助が戻れば神職  
を譲りたいとも思い、そのまま二度と子供も

親にあれば無視され、仲間と盗賊となれば捕  
存在を目の当たりにし、驚愕しかなかった。  
異形の子の生還を歓喜する父と、母という  
だけを頼りに探し、神主の前に立った。  
ねてみると言い残し、記憶にあった神社の名  
ろうと誘ったが、浅之助は一度だけ父母を訪  
と、小屋を放火し、逃げた。仲間は盗賊にな  
るしかなかった。知り合った五人ほどの仲間  
め、見世物にされることを受け入れて長らえ  
て長く生きることになった。子供であったた  
の見世物小屋に連れていかれ、異形の鬼とし  
浅之助は男二人に連れ去られた後、千日前  
久方ぶりに大きな声を張り上げて喜んだ。  
わかった。「浅之助か！ そうじゃな！」と  
の右目をふとみて、貫三郎はすぐに我が子と  
の前に立ちつくす男がおり、そのがらんど  
もある大男になって戻った。ある朝呆然と社  
せめてもの償いの気持ちの表れでもあった。  
作らず待った。幸せにしてやれなかった親の

まるだろ。うがその時にもうあの世にいつてしまおうと固く心に決めていた。浅之助は、ひどく拍子抜けするとともに、この世の情の浅さと深さを空恐ろしく思った。この父母は、見世物小屋などという場所は知りもしないのだ。「こんな顔で神に仕えられるんか」と問えば、母が齋服や狩衣と同じ反物で眼帯をあつら誂え、た。それを齋服とともに身につけ、ものもいわず立っている。父は「いや立派立派、あとわは儀の作法を学んだらええ。立派な男になつたのオ、浅之助」と心底満足そうだった。之助は貫三郎から作法を学び、形になりはじめたところだった。平生から眼帯をつけてはどうかと親は子を思い伝えたが、浅之助はそれだけは断った。

みやは父に手をひかれ、神社への細道を登っていった。黄昏の終わる頃に、その道を歩いでいれば誰でも不穏な気持ちになるが、みや



はなれた神社への道だった。ので気にしなかつた。  
「おとう、お参りにいくん？」  
「そういいながら、はずむように父についていく。父はものもいわない。」  
神社の裏手には、用水路が流れており、その奥にさらに険しく深い森がある。  
子の売買はそこで行われていた。あるものは見世物小屋へ、あるものは新地へと連れて行かれる。  
その辺りでも一際高台にある大きな森だった。そので、人の声が漏れにくい。浅之助もあの日、森にさらわれてそのまま千日前に連れ去られてしまったのだった。  
社を通り過ぎ、裏の森に歩いていくと、みにや「どこいくん？ お社こっちやで」と父に声をかけたが、そこに二人の男が待っていた。た。うち一人がみやに声をかける。「みやちやん、おっちゃん」と遊ぼうか。おっちゃんええもん持ってるんや」と、懐に忍ばせていた。

小さな飴玉をひとつ。  
その間にもう一人が、父に金を渡す。  
みやがみていない間に、父は姿をくらまし  
てしまう。一言、声をかけたい気持ちになか  
ったわけではない。しかし子を捨てる決断を  
したような男になにがいえるか、押し黙っ  
て去ってしまった。  
そして男二人は急にみやをかつぎあげ、口  
を押さえながら小走りに森の中を進み始めた  
いくらじたばたと暴れても男二人の力で押  
さえこまれてはどうにもならず、みやは唸り  
ながら泣き始めた。なにがなにやらわからぬ  
うちに父から引き離され、どこへ連れて行か  
れるかもわからない。  
自分には捨てられたのだから、そんなに悪  
い子だったのだから、みやは考えた。考  
えてもわからなかった。なにかがわかった気  
になれたことなど、一度もなかった。  
ふと、先日の母猫が現れ、みやと男たちを  
みていた。もう暗くなっていたせい、その目

が怪しく光った。みやが猫をすがる思いでみた時、みやの顔が赤く染まった。口の中に鼻に液体が流れ込んでくる。そして同時に、前を進んでいた男が倒れ、みやもその背中の上を倒れ込んだ。倒れた男の首から、血が大量に噴き出していった。そして後ろの男が、恐ろしい顔で背中を向けて逃げようとしたその時に、もう一人、大きな男がいることにみやは気づいた。それは浅之助だった。浅之助は、手にしていた鉈を、先程と同じように後ろの男の首に振り下ろした。叫ぶ力もすぐに果ててしまふと、ふたつの死体がそこに並んだ。みやがひとしきり泣き終わった後、浅之助は手水舎でみやの顔を洗ってやり、家に帰した。死体のある森に戻ると、そこには叫び声に気づいていた貫三郎がいた。

「すまんおとう。わしは神主にはなれん」

そう浅之助がいった時、父は彼を抱き寄せ耳元でこういった。

「大丈夫。さあ、埋めるで」

鉦で首を一刈り、それは見世物小屋から逃げるときに、仲間が小屋の主人を殺した時の殺し方だった。嬉しげに笑う仲間の顔をみて、浅之助もつられて笑ってしまった。

わしは天神様に仕えることなどできん。払うこともできん穢れ、ただの人殺しや。貫三郎に説得されても、その気持は消えなかつた。自分は盗賊になる方が相応しいと、あきらめの気持ちになつた時、みやと、その父と母が社を訪ねてきた。

父母は、浅之助の穴の開いた顔をじつとみて、いった。

「この子の、ななつの祝いの儀をここでやってもえんじゃろうか。あんたにやっつてほしいんや。どうしても、あんたに」

みやがああ、の恐ろしい経験も忘れたようにかわいらしく、浅之助に寄つてきた。

浅之助は初めての儀を少しばかりぎこちなく、しかし滞りなくこなした。その間、あの猫の親子が社の周りをうろうろとしており、みやは気を散らしていた。父母に注意されながら、なんとか最後までおとなしくしていた。すべて終わった後、浅之助は最後に、みやに言葉をかけた。「この社まで細道を登ってきたやろう。そこまでが神の子、これから、おまえはもう人の子じゃ。あの猫ほどの価値もない。生きれば生きるほど穢れがついてまわる。価値はないが、それでも誰にでも日が昇る。こわい帰り道も自分の足でしっかき歩いて帰るんや。なににも心配はいらん。腹の足しにはならんが、これを持っていけ親の元で、よう遊べ。遊べ」  
「そういって、手作りの紙風船をひとつ、手渡した。」